



特集 平成24年度 全国学力・学習状況調査の結果について

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、学校教育施策の成果と課題の検証とその改善を図ることを目的に、平成 19 年度から実施されている「全国学力・学習状況調査」が今年度も実施され、このたびその結果が公表されました。

調査の対象は小学 6 年生と中学 3 年生で、教科については当初から実施している国語、算数(数学)に加え、今年度から理科も実施されています。

今号では、本町児童生徒の調査結果の概要についてお知らせするとともに、調査結果から見えた本町の課題を明らかにし、その課題を学校・家庭・地域と共有して、子どもたちの学力向上と心身の健やかな成長をどのように支援し育んだらよいか・・・について考えてみたいと思います。

まずは、「学力テスト」の結果です。

学力テストの内容は次の通りです。

小学校は、国語・算数・理科。中学校は、国語・数学・理科で、いずれの教科も、主として「知識」に関するA問題と主として「活用」に関するB問題で構成されています。

～小学校の結果から～

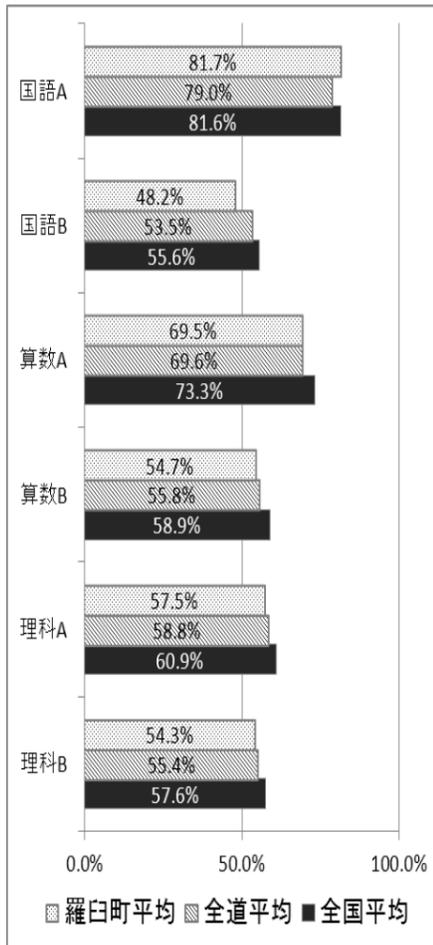
国語Aでは、百科事典を読み、目的や意図に応じた表現の書き換え、新聞記事等の情報を整理して簡潔に書くことは、全国・全道を上回りましたが、相手の話についてねらいを明確にとらえることに課題が見られます。

国語Bでは、提示された内容を読み取った上で質問したい内容を明確にして発表することに課題があります。

算数Aでは、三角形の底辺と高さの関係や円の中心と半径についての考え方、算数Bでは、応用的な問題に課題があります。

理科Aでは、植物の受粉と結実の関係、科学的な言葉や概念についての理解力に課題があり、理科Bでは、天気の様子と気温の変化の関係について、データを基に分析し文章にまとめることに課題があります。

平均正答率の比較



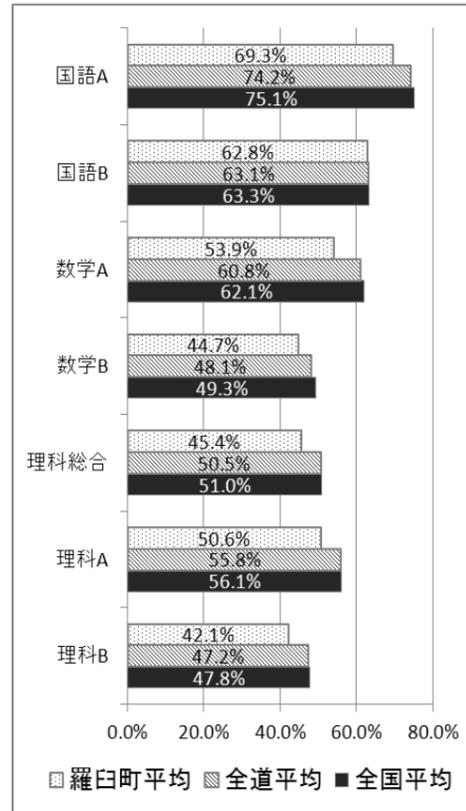
～中学校の結果から～

国語Aでは、漢字の音読みと訓読みについての理解や漢字が表している意味の理解力に課題があります。国語Bでは、全道との大きな差は見られませんでした。

数学Aでは、数学的な表現や数量、関数の理解に課題があります。数学Bでは、数学的な問題解決法に課題が見られます。

理科Aでは、地学的観察、実験技能及び自然事象についての知識や理解力に課題が見られ、理科Bでは物理的領域での科学的な考えと根拠の表現に課題があります。

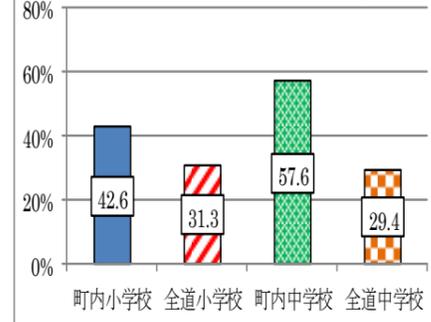
平均正答率の比較



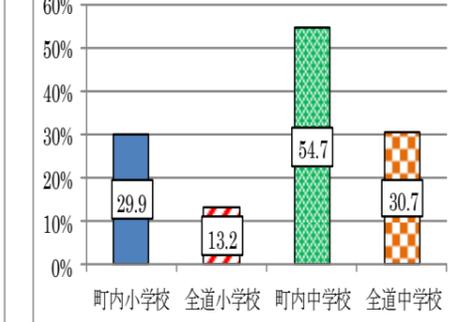
次は、「学習状況調査」の結果です。

今回の学習状況調査で、全道平均と羅臼町の結果と比べて特に差が大きかったのは、「テレビゲーム等の時間」と、「インターネットの使用時間」です。一方、睡眠時間は全道平均に比べ少ない状況が伺われることから、計画的な家庭での生活習慣を身につけることが重要とされます。

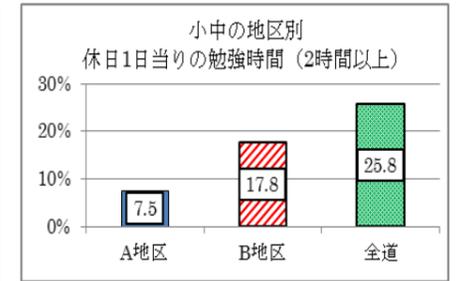
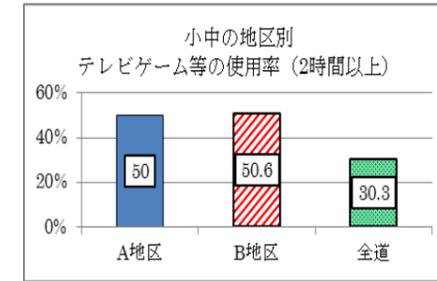
テレビゲーム等の時間 (2時間以上)



インターネット使用時間 (2時間以上)



また、町内地区別の学校を比較しても、テレビゲームやインターネットの時間が多く、また学校授業以外での1日当たりの勉強時間、土日や学校が休みの日の1日当たりの勉強時間にも、地区別の差が大きく見られます。



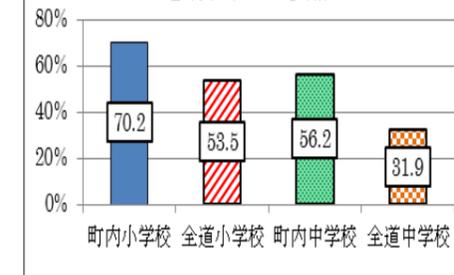
この結果から、家庭での過ごし方として、テレビやインターネットを利用している時間が多く、読書や家庭学習に向かう時間が少ない状況が読み取れます。

テレビやインターネットは、利用の仕方でも有効・有益な面もありますが、本人の意思とは別に、画面が勝手に次の場面や答えを映し出すことから、子どもたちが、自ら「想像する」「深く考える」ということを奪っているという一面も、指摘されているところです。

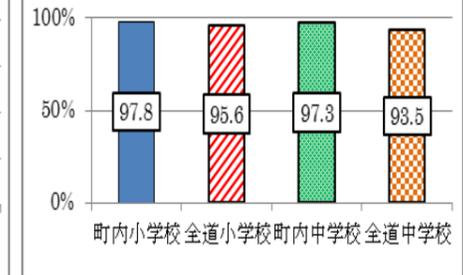
そこで、保護者の皆さんに考えていただきたいことは、家庭での過ごし方について、子どもと一緒に話し合ってルールを決めることの大切さです。基本的な生活習慣（起床・就寝時間、食事・入浴時間、家族団らんやお手伝いのことなど）に加え、特に家庭学習の時間を一日の生活の中に位置づけ、習慣化を促すことが重要ではないでしょうか。

最後に、全道平均と比べて良かったという結果もあります。「地域行事への参加」「朝食を毎日食べる」「家族と一緒に夕食を食べる」「学校で友達に会うのは楽しいと思う」などです。

地域事業への参加



学校で友達に会うのは楽しい



これは、羅臼が持つ地域特性であり、都市部では希薄化していると言われている地域の連帯や家族の絆が、羅臼にはまだまだ保たれているという証(あかし)ではないでしょうか。

こういった羅臼の良い環境は、子どもたちの成長にとって大事な要素であり、将来にわたって繋いでいきたいですね。



お弁当のデザート 何を入れてる??

今号と次号は、お弁当のおハナシです。

幼稚園に通うお子さんをお持ちの方は、毎日お弁当の内容を考えるの、大変ですよ（´Д`）。そんなお弁当作りのヒントにして貰えると嬉しいです♡。さて、今回はデザートのお話。皆さん、どんなものをデザートに入れてありますか？

デザートって、そもそも何でしょう？

デザートはフランス料理など、西洋のコース料理の最後に出てくる甘いもの。一方、日本のコース料理、懐石料理にはデザートはありません。この違いは一体何？

◎デザート文化が始まったのは古代ローマ時代◎

デザートが付く料理で有名なのはフランス料理。このフランス料理、実はイタリアからの影響を強く受けています。イタリアでは、古代ローマ時代からデザートを食べる習慣があったことが記されています。

なぜデザートを食べるようになったかという、イタリア料理やフランス料理では、日本料理のように料理中に砂糖を使ったりせず、野菜を使って甘みを出します。このため糖分を補う目的で、食事の最後に甘いデザートが付くようになりました。西洋から広まったデザート文化。“食後に甘いものを食べる”という風習が、今ではラーメン屋さんのメニューにもデザートが登場する時代になりました。

こどものお弁当はどんなデザートが良い？

デザート本来の目的は糖分補給。日本の調理方法では、下ごしらえや調理の段階で砂糖が入っているものや炭水化物（体の中で糖分に変わる栄養素）が多く含まれているものが多いので、実はデザートで糖分を補給する必要が無いんです。毎食デザートを食べていると、糖分の摂りすぎになってしまいます。

でも！ こどもにとってお弁当のデザートは楽しみの一つ。糖分の摂りすぎにならないようなものを選んであげられればOK!!

オススメはこちら！

- ・ヨーグルト
- ・果物

甘さしっかり、糖分控えめ♡

こちらは、甘さも糖分もたっぷり..

- いわゆる“デザート菓子”
- ・プリン、ゼリー、ムース類
 - ・ケーキ類（チーズケーキ、シュークリームなど）
 - ・クレープ、クッキー、ビスケット類
 - ・飴、チョコレート類
 - ・おまんじゅう、ドーナツ類

あまり甘くないと感じるものもありますが、実は冷たい食べ物には、甘みを感じにくいので、お砂糖がとてもしっかり入っています。溶けたアイス、食べたことありますか？チヨー甘いんですよ…

上手に選んであげてくださいね（＾＾）y

こまぐさ学級 紙芝居に挑戦！

公民館高齢者学級「こまぐさ学級」では、年間を通して各種学習や趣味活動、レクリエーションなど、多彩な生涯学習プログラムに取り組んでいます。「笑って笑って若返ろう」というのが担当者のモットーです。

今回は「紙芝居を演じる」ことに初挑戦！司書が全面協力しご指導させていただきました。そして練習の成果を幼稚園で実演発表するところまで頑張りました。

紙芝居は、「子どもの頃に観たよ」「懐かしいわ」という方もいて、昔話などは楽しそうに観ていただきました。しかし実際に自分が演じるとなると、なかなか思うようにいかず「声、間、抜き方」など場面に応じた演じ方に苦労しました。公民館で何度か練習し、それぞれが自宅に持ち帰って更に練習してくることにになりました。



幼稚園の控室、いよいよ発表直前の読み合わせ。「あれ、こめくっていいのかい？」「なんか絵の順番が違う」など大混乱。何度も練習したはずなのに、どうしましょう…と私も内心焦りました。

しかし、こまぐさ学級は「笑って笑って」がモットーなのでから「失敗してもいいから楽しんでやりましょう」と声を掛け合って迎えた本番。紙芝居が始まると、園児たちがおばあちゃんの紙芝居に笑顔いっぱい。いろんな反応が返ってきました。

紙芝居は、そもそも読み手と観客、また観客同士が作品を通して一体となり、共感し合う「小さな劇場」です。そこに人の心の交流と温かな空気感が生まれます。

終了後、「ああ楽しかった！」「こんな楽しい経験はない」というおばあちゃんたちの喜びの言葉が聞けました。

自分にとって少し高いハードルを越えてみる。新たなことに挑戦してみる。それが達成感につながったのでしょうか。そして年齢を問わず「人と人との心の通い合い」は、自分の存在価値や生きる充実感を見出すことにつながるのだと思います。

電子機器の発達で、我々は便利な日常を手に入れました。でも心の通い合う日常は簡単には手に入れることはできません。「紙芝居」という日本文化を介し高齢者と園児が心の交流を図ることができたことは、私にとっても嬉しい新発見でした。📺

前号から「子育て中のパパ・ママにプロはいない!!」…だから、保護者やご家族の皆さんに子育てに関する基礎・基本を学んでいただきたい、ということで「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」について掲載しています。

今回は…、(その2) 学童期の「小学校低学年」に関する特徴と課題について掲載します。

小学校低学年の時期の子どもは、幼児期の特徴を残しながらも「大人が『いけない』といことは、してはならない」といったように、大人の言うことを守る中で、善悪についての理解と判断ができるようになります。また、言語能力や認識力も高まり、自然等への関心が増える時期でもあります。

また、この時期に限らず、家庭における子どもの徳育に関わる課題として、都市化や地域における地縁的つながりの希薄化、価値基準の流動化等により、保護者が自信を持って子育てに取り組めなくなっている状況も見られます。



さらに、小学校低学年の時期においては、こうした家庭における子育ての不安の問題、子ども同士の交流活動や自然体験の減少などから、子どもが社会性を十分身につけることができないまま小学校に入学することにより、精神的にも不安定さを持ち、周りの児童との人間関係をうまく構築できず集団生活になじめない、いわゆる“小1プロブレム”という形で、問題が顕在化することが多くなってきています。

これらを踏まえて、小学校低学年の時期における子どもの発達において重視すべき課題としては、以下のことが挙げられています。

①「人として、行ってはならないこと」についての知識と感性を自然としみ込むように育てることや、集団や社会のルールを守る態度など、善悪の判断や規範意識の基礎形成。

②自然や美しいものに感動する心などの育成(情操の涵養)



…とすると、この時期は、この課題を保護者が十分「心」ととめて、叱ったり諭すこと、保護者自身(大人)が子どもの手本となること、外で一緒に活動する機会を持つこと…などが、重要になってきますね。

羅臼町には、町内のほぼ全ての主だった団体で構成する「羅臼町青少年健全育成町民会議」という組織があります。この会議では、「大人が変われば、子どもも変わる!」を合言葉に、町内青少年の健全育成を推進しています。地域の大人みなさんが、子どもたちの良いお手本となるよう、ご理解・ご協力をお願いします。